

五島の民間宗教者について — ライフヒストリー調査についての覚え書き —

福島邦夫*

Shamanic Practitioners of the Goto Islands: Notes on the Interviews of Their Four Life Histories

Kunio FUKUSHIMA

Abstract: This paper discusses the problem accompanying the use of life histories in the study of shamanism. The life histories of four shamanic practitioners of the Goto Islands are introduced. One narrative had been recorded previously by Sasaki Hiromiki of Komazawa University but it was also recorded by the author. The other three life histories are introduced from the author's own research.

It becomes clear that narrative is dependent on the relationship between the narrator and the listener. In the case recorded by Sasaki and author are different from each other, because of the shaman took into consideration the viewpoint of the listener. That does not mean the narrative of the shaman is a fiction, because the story is told to persuade the listener, the story-teller changes the narrative to make it familiar to the listener.

Key words: life history, shamanic practitioner, narrative, shamanism

序

五島の民間宗教者についてはすでに佐々木宏幹による報告がある。¹その中で佐々木は五島の民間宗教者をシャーマンの職能者と規定している。興味深いことに著者と佐々木は同じ宗教者にインタビューしている。しかし、その内容は若干異なっている。本稿では五島の民間宗教者のライフヒストリーを記述し、最後にこうしたライフヒストリーを中心とした聞き書きにおける調査者とその対象者の相互依存性について若干の考察を行いたい。さて、私は以前にこうしたシャーマンの職能者のライフヒス

トリーに関して小稿を記したことがある。²その中で大橋英寿にならって、シャーマンの職能者のライフヒストリーを入巫以前（一次的社会化期）、入巫期、成巫期、（巫業期も含む）に分けて考察したことがあった。今もその考えは変わっていない。³ここで強調しておきたいことはこうしたライフヒストリーはそれが真実であるか、或いは虚構であるかは問題ではない。それは一種の彼らの宗教的な信仰内容の吐露であり、あるいは聞き手に対しての説得（宣伝）であるかもしれないということである。以下に述べるライフヒストリーは宗教という話者の主観的世界をのべたものであるだけに一部の方々にとっては荒唐無稽な作り話であり、学術的な検討にあたいしないものとおられるに違いない。その場合には中野卓『口述の生活史—ある女

*長崎大学環境科学部

受領年月日 2007年4月6日

受理年月日 2007年5月8日

の愛と呪いの日本近代』⁴を参照して頂きたい。本稿はその精密さや再現性に及ぶものではないことは承知している。また、何度も再訪して「部厚い記述」を記したものでない。しかし、読者は社会学ではすでに古典として認められている同書でもその中に日本の呪術宗教的な世界がいきいきと語られていることに気がつかれるはずである。本稿は話者と聞き手（私）との間に成り立った会話に基づくものである。テープレコーダーで収録した部分もあるが、テープをおこした文をそのままには記さなかった。後で記憶に残ったもの、ノートにとったものを材料にして文書化した。従って文責は私にある。なお、本名は伏せイニシャル化してある。公表して迷惑がかかることをおそれるためであり、そのほかの意図はない。以下個別事例を述べることにする。

1.

事例1 S・N（大正10年生）五島市奈留町 70歳（1990年2月25日調査時）

<ライフヒストリー>

この信仰はもともと母の信仰であった。母は嫁姑の問題に悩み、「心の杖と柱」にするために信仰を始めた。母は一厘銭で御身（ごしん）を作った。今私は五円玉で作る。真ん中に穴の開いた硬貨を糸に通して「善星皆来、悪星退散」と記した物である。これを御神体として拝む。私を育ててくれた祖母も大村藩の御殿医の娘である。（ちなみにS・Nの弟は奈留町で大きな病院の院長を務める医師である）母は養子であったので苦労が多かったが、金銭的にも苦労が多かったようである。母の信仰について、弟は一応科学者のはしくれであるので嫌だったが、私は母の苦労しているのを見ていたので悪く言うことはないと思っていた。私は女学校を卒業して19歳の時、大連にいる叔父（医者）に呼ばれて中国に渡った。山下汽船という会社でタイピストをしたが、その会社の立派だったことは今でも覚えている。一度奈留島に帰り、結婚して再び中国に渡った。長男が生まれ、長男を見せようとして帰って来たら、そのまま終戦となり、奈留島へ住むこととなった。私が24、5歳の時、父が亡くなった。49歳の若さであった。私が27歳の頃には母の所にはもうすでに、毎日30人くらいの信者さんが来ていた。あるとき、大きな木で彫ったお大師さんの像を担いだ人がやってきた。阿野サク（女）という人で、中国の青島からの引き上げ者だった。「自分だけでよか（良い）神様を拝まないでみんなにも拝ませたら良かる

う」ということになり、皆でお祀りしようということになった。阿野サクさんはお大師さんを当時で68年前にお祀り始めたという。皆でお祀り始めたのは昭和34年頃だったと思う。月待ちと言って、毎月集まったが、神様が降臨する時刻は夜おそく12時過ぎることはざらだった。阿野サクさんに神様が降臨して、神の言葉をのべた。それをトキヒラキと言った。人がだんだん増えて部屋に入らなくなったので、亀井旅館の隣の家を借りた。私自身はあんまりこうした宗教の道は好きではなかったが私自身にもいろいろ不思議なことがあった。

〔観音像が鳴った話〕

観音像はもともと篠栗の呑山観音寺にあったものを、ある信者さんがかわいいと言って寺から黙って持ってきた物らしい。母が祀っている祭壇から、私が自分のふところに入れるとギーという音がした。広い家で何だろう、船かしらと思っていると、ギィギィギィと3回言った。この辺では「毛の一本立ち」というが、全身がぞうっとした。母は私が耳のお慈悲を受けたといった。

〔リンの音〕

綺麗なリンの音が聞こえたことがあった。「京都から買ってきたのですか。音のいいこと」と私が言っていると母は「そんな物はない」という。本宅の方から聞こえてきて消えていく。変だなと思うことが続いた。

〔手に受ける一入巫体験1〕

私が50代に入った頃だとおもう。母がお大師さまを拝みにいこうと誘いにきた。あまり気が進まなかったが、夫がちょうど出張中であつたので拝みにいくことにした。大師像の前で、「すみません。私は何も知らないから、南無大師遍照金剛を唱えます」と言ってそれだけを唱えていると、三鈷を持った左手がこう上下している。（手の上げ下げをやって見せる。-福島）どうしたのだろうか。目が変になったのだろうかと思った。家に帰って、母に話すと「そなたの心一つでどうにでもなるぞよ」と言われた。急にありがたい気持ちになった。次の日お礼参りに行った。線香をあげた。人間が偉くなられて仏様になった。死んだ人間にあげるお経を上げて喜ばれるかも知れない。自我偈（ジカゲ）でお受け取りください。お経を読むとそれに合わせてリンの音がする。お遍路さんが近くに来ているのだろうか。音は遠くにもならず、近くにもならず私のお経に合わせて鳴っている。一礼すると横にセイシのぼあちゃんがきちんとすわっていた。母は「よくぞ短い期間に

悟った。ほめてとらせるぞ」と言った。セイシのばあちゃんにも神が乗ったという評判があった。「これが乗ったということかね」と私がいうと、母に「あなたは心がきれいだから乗ったのです」と言われた。手を合掌するという事は自分を磨くことではないか。私は損をした。人に遅れをとらないようにしてきたつもりだったが、私はものすごい遅れをとった。いい方に何でも解釈出来るように自分の心を養わなければならない。御座（集会）があるとき、観音を出してよいかと阿野先生に尋ねると「観音ヒケンの経」を読めと言われた。私はヒケンの経を知らないと言ったら、先生は「親があんなに修行しているのに知らないのか」と言ってヒケンの経をくれた。「これを一週間あんたの都合の良いときにあげなさい。七遍読めばいい」と言う。

長短があったがどこで切って良いかわからない。「一年生が本読むよりあさましか（へたくそでみっともない）」と主人が言った。一日に七巻ずつお経を一週間あげた。先生について弟子にさせてくれ、手に下り、足に下がり必死ですがって跡を追いかけた。あっぱよ一。（驚いた意味）弟子にするともせんとも言われないまま先生について行った。

〔入巫体験2〕

50代にはいって少したったころ、三本神社という平家の落人を祀った神社に行った。太上様（太上神仙鎮宅霊符尊生とって本尊である—これについては後述する—福島）の日であった。多くの人が集まっていた。お経がすんだ時、白でつの結びをした姿がぼんとでた。（目に見えた。）次に烏帽子を被った姿がでた。その烏帽子は普通のものではなく、だだっぴろい烏帽子であった。（あとで聞いた話だが、それは兜の下に被る烏帽子であると言う）そうこうしているうちに斜め横の年取った人の姿が戦をするときのざんぎり頭をしているのがみえた。その姿の膝までのものを見せた。「私は何も知りません。神仏に祀られる人ならば、どうぞこれをお受け取りください」と法華経の短いものをあげた。おわったとたん、「無礼者！下がりおろうぞ」という自分の声が出て気がついた。男の衆も女の衆も私から離れて円座に座っていた。若い宮崎さんがしくしくと泣いていた。私は自分の声で我にかえった。私は心の中で「ごめんなさいね。ごめんなさいね」と何度も謝った。「太上の頼みである。二代目を嗣ぐものがないから、行から行へとつないでくれ」と自分の口から出た。自分の中で何てことを言ったんだろう。冗談じゃないわよと思った。母に何だろうかと尋ね

た。私は烏帽子をかぶった人の絵を描いた。阿野先生は「やっぱりお慈悲をいただいたね」と言った。「神は上から見たら、膝まで見える。下から見たら全身が見える」と先生は言われた。

一ヶ月ほどしてから網元の家に呼ばれた。拝みの依頼であった。先生が「Nさん、お香を焚きなさい」と言った。母が「おおばんぎゃあか（大それたことを）」と言った。先生と同格か、同じ位の人でない香は焚けない。先生が「その人の幸せを念じながらお香を焚きなさい」と言った。先生は衣を手を持って、「衣の袖にたとえたら、行がほころびたら縫い、また縫いというふうにながら、行から行へと重ねればよい。行が破れたら、またやり直せばよい」と言った。それなら私にも出来ると思った。「一週間行をせよ。三日目に人が来て無言の行が破れる。またやり直せばよい」私は「行者のまねは出来ない。家庭の閑暇に手を合わさせてもらいます」とお願いした。阿野サクさんは長崎に引き取られて帰った。83歳でなくなった。昭和51年4月26日であった。お母さんが一人になった。母が私にトキヒラキ（口からお慈悲がでること）をしろと言った。しばらくしてから、母が私に席を譲り、私が導師を勤め、母が脇導師になった。

<宗教活動>

1. おみくじを降ろす（神様の言葉を聞く）

学校の試験、家出人、尋ね人、失せ物（お金がなくなった場合、おみくじを降ろすなという。問題のもとになるから、方角をおしえる。例えば家にあるなどと教える）「返る物はかえるよ。返らんとは返らんよ。」ときれいな気持ちでいれば良い。心の広場を作れば神様が来る。

2. 金物あげ

海の中に鉄類をはじめ金物を捨ててはいけない。竜宮の庭を汚す。特に刃物を捨てることはよしとしない。その場合、御幣をあげて、海に流す。「すみません。みてぐらを流しますからお許し下さい。センリ・セラドの神（大海原の神）」と言う。魚がとれるようになって、魚をお礼に持ってきた人がいる。

3. 念波（ねんば、生霊ともいう）

人を恨めば自分に戻ってくる。自分の周りの弱い人に良くないことが起きる。

念波を一年半おくられたことがある。念波は必ず戻ってくる。母が毎晩就寝時になると眠れない。母はそこでエイッと行って返した。今度は相手の人が眠れなくなった。次は母がまた眠れない。そういうことが続いた。私が手を合わせたところ、手が上に上

がって弓を放つかたちになった。「へどき放ちて」と口から出た。これは下関にある一宮というお宮の宮司さんから習った祝詞の言葉である。「すみません」相手の気持ちが良くなるようにと祈った。身にかからないように切り払うこともあるが、相手の心が柔らかくなるように、きれいな気持ちでいるように祈ることが一番だ。私はこの人のおかげで生霊、死霊の区別がわかった。

〔神歌〕

その時々心に浮かんだものを神歌として、信者と一緒に歌う。

「心を清め、行を積み、祭壇を清め、経を読み、その身そのけん、ほこりなく六波羅密の行をせよ」*昭和43年3月3日の日付あり。

「愛の光に生きながら、心の鏡みがきて、六根清浄の身の穢れをいつの間にやら洗いさり」*昭和43年3月31日の日付あり。

「六波羅密を行じては神仏（かみ）のお慈悲を宣揚す、十界一如体験と人心化導道に生き」*年号なし〔修行〕

神の知らせは行を積んだ人、積まないうちにでる人もいるが、行を積んだ人の方が強い。身の行、口の行がある。口の行は口で唱えるもの、または無言の行がある。身の行としては、裸足の行、ご飯断ち、お茶断ち、朝ご飯抜き、ご飯抜きの行等がある。最後の行は六波羅密の行である。本来山から山へと渡る行であるが、家庭人としては出来ないから、上に述べた行のうち一つを一ヶ月することによって、十界に入る。

そのほかの行としては、布施（金銭の問題だけでなく、心の布施でなければならない）、忍苦（いかなることにも耐え忍べ）、持戒、知恵（行をしながら、心をみがけ）、善（一日一善）、戒律（一善戒を守る）不殺生、不悪口、不偷盗、不両舌、不邪淫、不慳貪、不妄語、不瞋恚（腹を立てない）不綺討、不邪見〔本尊〕

観音-貧しい人を救わんがため、手伝いをそなたにしてもらいたい。気の合う相手が出来たとやった。亀蛇合形（キダゴウギョウ）合形の中にも七十二符の神様がいる。役行者、弘法大師、不動明王、七十二符などである。

御身（ゴシン）5円玉を72個積んでこの神様の真言を入れておく。お金を留めておくことは良くないのでお祭りの時福銭としてお盆に載せる。（先述）七十二符の掛け軸-おかけ軸を持ってきたのは奈良尾の人である。

神棚も勝手に信者さんが作ってくれた。神棚を作ったときおみくじがでた。いつもの声で「わきいずるかな。わきいずるかな。天地の恵みの恩なくて、はこぶみやすぎ」と出た。その時不思議なことがおこった。お参りに来た人は12人だったが、帰るときに一人入れ違いに入ってきた。「あら、どうしようか」と思っていると1個お化粧部屋に湯呑みがあるのを思い出した。「13個もあるぞよ」と神様がおっしゃった。観音様がお聞かせ下さったのだと思う。お下りになるのは自分が祀っている神でこれは裏の祭壇にある。これは自分だけで祀っている。はじめて下った神で80歳くらいのお姿である。皆様の神は表の祭壇にいる。45歳くらいのお姿で顔は丸顔で「いつでも来い」という男性の姿をしている。千早をかけた姿である。お経を唱えて、「善星皆来、悪星退散」ととなえると「おすがり」がある。

「おすがり」というのは人の話を聞いていると心の中に声がある。「半分聞け、今のは嘘ぞ」等と注意してくださる時もあるし、「おみくじ」ですずっと諭されることもある。先年もお祭りの晩に拝んでいると「台風が来て風が大変強くなる」と出た。皆に電話して来ないように勧めた。台風がきたが、この家だけ瓦が飛ばなかったし、ガラスも割れなかった。〔祭礼〕

百万遍をする。観音様の命日は新の17日である。そのほか太上神仙鎮宅靈符尊上（太上様）の祭りをする。期日は1月7日、2月8日、3月3日、4月4日、5月5日、6月7日、7月7日、8月15日（大祭-月見の宮とって150名位くる。）9月9日、10月21日、11月7日、12月27日である。正五九は主月（しゅげつ）と言って大きなお祭りをする。福岡にも道場が2つ出来ている。

〔災因論〕

かぜ一具合の悪いとき、この辺の人はかぜにあたったんじゃないだろうかと。奈良尾の人は特に「風どく（ふうどく）」とも言う。「行き会いかぜ」「なだかぜ」とも言う。これは霊の作用で、行き会いかぜというのは悪いのにあつた時で、お祓いをするのと取れる。念波のかかったもの、生霊と死霊のくついたもの、それに狐の乗ったものなどいろいろな場合がある。生霊、念波は離れにくい。普通の仏さん（死者）のついたものは離れやすい。仏様のさわり（死者）の場合、神様ではどうにもならないので仏様（観音、弘法大師、不動等）で祓ってあげる。私は仏様を脇仏として祀っている。そのおかげでたくさんの方が救われた。

[免許]

免許状は母の時代に四国の石鎚山より受けている。8月15日の大祭の時にはお米を袋に入れてその上に御幣を立てて、石鎚山と思って拝む。御礼報謝と言って御初穂を石鎚山にあげる。役の行者も祀っている。

[特殊な行]

胸中三寸（むねなかさんずん）の行
アイウエオを清音、濁音を全部言う。例えば「ババババ、ビビビビ、ブブブブ」と唱えた後、その後で神歌（前述）を言う。

三番目の娘に嗣がせるつもりである。調査時に若い娘さん（胸中三寸の行をした。）目の不自由な老年の女性（大正8年生）が来ていた。その2人が組みになって行をした。

2.

事例2 Y・T 奈良尾町 68歳（1990年2月24日調査時）

奈留町S・Nの弟子であると言う。

<ライフヒストリー・成巫体験>

私はこの家にお嫁にきて43年になる。30歳の少し前になるころ、主人が長崎-大阪間のフェリーの仕事に就いたので、一年ほど長崎に行って住んだことがある。そのころ、長崎の法華経信仰の人に会う。奈良尾の鍋倉神社のことなど奈良尾のことに詳しくかったので、主人が興味を持って信仰しているうち、妻の私の方が体が妙なふうになった。他人の腹の中が見え、声が聞こえるようになった。電車に乗っていても相手の言葉が聞こえてくる。「紙を買ってこい。字を書かせる」と言う声が聞こえ、字を書くと普段私の書く字は下手なのに大変上手にかけた。神様、仏様によって書かされたのだと思う。法華経の行者に「神上げ」の祈祷をしてもらおうと「十一面観音様にご苦労しておられます」と出た。「しかし、もうそうなったらどうしようもない。南無妙法蓮華経をあげなさい」と行者が言う。それから10年間苦しかった。一人で苦しんだ。主人が帰ってきて奈留島の漁労長になった。その頃から落ち着いた。奈良尾の人たちは皆基山の中山不動（中山身語正宗）を信仰する。私も基山には4、5回行っているが、お得度はいただいている。私がこのようになったのは「フミフセホウセ」と言って父母のおかげを受けているせいである。父が他人への奉仕をよくしてきたおかげである。

[災因論]

死霊かぜーかぜがつく場合、かぜはほとんど死霊さんである。道で足が痛くなる。肩が重くなる。休んでいても、布団の中でそうなる場合がある。死霊かぜである。奈良尾では「フウドク」という。筋炎である。「はしりフウドク」とも言う。奈良尾のTさんはフウドクを口に含んで吹くと言う。

[本尊]

十一面観音、太上神仙鎮宅靈符神尊主、他に役行者、弘法大師、亀蛇合形、奈良尾産土神社、おひかりさま（メシア教の神）など。

[宗教活動]

いろいろな相談を受ける。縁談、試験の祈願、家出人の捜索、家出人の足止めの祈祷等である。

家ばらいをする。

月祭り一旧の17日である。

お加持-お経を唱えながら、お数珠で悪いところをなでる。（ひどい場合は大般若経で祓う。）手が自然に悪いところへいく。そしておかげを頂き、直る。見せてくれる一どの方角の病院に行けば良いかを教える。従前の病院に行っても直らなかった人が直る。病気の場合、病院に行っても直らない人は「おすがり」（先祖の霊）がかかっていることがある。先祖が頼みがいのある人にたのむのである。「おしらせ」とも言う。「おしらせ」は誰に出るかわからない。

[おすがりの例]

- 1) 長崎のNTTに勤めている女性がおなかが痛むと言ってお願いに来た。私は「これは先祖がおすがりしているね。手術をしない方がいい」と言った。後で医者に診てもらったらやはり手術をしなくてもいいということだった。私は毎日お経を上げなさいとすすめた。そうすると良くなった。もう一度、今度はその方のお母さんがおなかが痛いと言ってやってきた。今度は病気であると出た。医者に診てもらおうと子宮筋腫であった。手術を受け今はピンピンしている。
- 2) 有川の人で潜水病で体が冷えて直らない人がいた。生活保護を受けている人で大変であったが、車を運転しているので、一週間こちらへ来てみなさいと言った。3日間通ってきた。そうすると下半身がポッポッと熱くなると言ってきた。他の祈祷師さんのところへ行ったら、「海の中にもう一度潜ってその場所の石を拾うてくれば直る」と言ったそうだ。潜水病の治療でもう一度海中に潜るのも理にかなっているが、私はその体では無理だ

と思い、私は「毎日お茶をあげて、南無阿弥陀仏と唱えれば直る」と勧めた。4日後にはその人はもう直っていた。

- 3) 私の友達の息子さんが31歳で鹿児島で危篤状態になった。けいれんがきて、片方の手を親、もう片方をお嫁さんが押さえた。佐賀の祈禱師のM先生に頼まれたが、鹿児島だから、遠くていけない。私にも電話があった。私も足が悪くて寝ているとその人の顔が出てくる。けれども、その顔はその割に心配そうな顔ではなかった。N先生に相談すると「あら、ふうちゃん。この人はおすがりよ。病気じゃなかと」と言われた。私が2、3日あとに電話すると「今から電話しよう」と思っていたとおっしゃられた。すっかり良くなっていた。
- 4) 妹は長崎で習字の先生をしている。妹の息子は当時高校生であったが、家に帰って毎日寝ていた。妹は息子に寝てばかりいてなんだと叱った。そうすると反対に息子は怒り、「自分は兵隊で死んだ何々だ。そんなに粗末にするな」と言った。息子はずっと機嫌が悪かったが、翌日お墓に連れて行くとその墓誌には息子の言った通りの名前が書かれていた。その前でお経を上げると息子の気持ちはすうっと良くなっていった。原爆で死んだ人の墓でその霊を背負ってきたのであろう。妹も私と同じ体質なのである。

[見せてくれるの例]

主人のおじいさんが入院した時であった。私は「どうか助かってください」とお願いした。「孫のランドセルを背負って学校へいく姿を見せてください」とお願いしたら、おじいさんの顔が浮かんだ。その顔にタオルがかかっていたが、それが半分めくっていた。そうして助かった。次にまたおじいさんが病気になった。今度はお不動さんが顔を押し上げている姿がみえた。N先生(事例1)に尋ねたところ、先生が紐で引っ張っているかと聞いた。いいえ手で押し上げていますと答えた。(手を見せる一福島)それならば助かるとおっしゃった。本当に助かった。神様は3回までは救ってくださるが、4回目は駄目だという。病気は先祖を祀れば直る。しかし、本当の病気もあるので私は医者すすめる。

3.

事例3 I・S 大正1年生 富江町生 76歳
(1987年調査時)

福江市職人町「お大師さん」「福江の弘法さん」等呼ばれている。

<ライフヒストリー>

実家の姓は尾崎といい、先祖は仏師であった。小さいときからお寺が好きで、お寺の日曜学校に通い、「いいことをしなければならぬ。」という教えを受けた。

(主人の病気) 20歳で結婚したが、結婚10ヵ月で主人が病気になった。10年間病床に伏していたが、私が30歳のときに亡くなった。主人が亡くなったとき、夢枕に弘法大師があらわれ、「すがってくる人を助けてあげよ。そうすれば、おまえにこういうものを授けよう」といって、のし袋のようなものを右手に出した。三分の一を伊勢、三分の一を高野、三分の一をそなたの小遣いにするといった。もらうだけではなく、いまは不自由な人に援助をしたいという気持ちが出て、お参りしたひとにおしるしに何かさしあげている。わたしは弘法太子をまえから祀っていた。

(穴弘法) 弘法大師との縁は長崎市内の穴弘法にある。12歳のとき母が死んで、13歳のとき義母が長崎からやってきた。義母は穴弘法(長崎市内の真言宗寺院)を信じていた。今田師は昭和15年、18歳の時に長崎にいったことがある。その時に腸チフスをわずらい死にかけたとき、義母は穴弘法へいき、霊水をもらってきてのませた。帰るときに再び元気になったら、穴弘法の土を踏ませると約束してきた。しかし、結局タンカからタンカへと運ばれ、土が踏めなかった。

27歳のとき、私は黒瀬にいた。色の白い白髪の人が泊まった。その人は「あなたの目には見えません。私の目には見えます。あちらの大師さまがまばたきをしておられます。あなたはお大師さまに足をむけて寝られませんか」と行った。あとでノートにかいた名前をみると佐世保市岡本法善とあった。いま調べてもこのひとの名はわからない。18歳の時、チフスにかかったが、結婚してから、25年後また腸チフスのような病気にかかった。下痢が続いて病気は直らなかった。なんで、こんな病気になるのかと思い、いざって仏壇にむかうと「穴弘法」という言葉がとつぜん浮かんだ。「ゆるしてください。お腹がなおつたら、土を踏みます」と約束した。それが、旧の八月十四日、八月十五日、八月十六日になったら、ピタッと直った。懺悔をするといつて穴弘法へお参りにいくことにしたのだが、その時、私の主人のいここにあたる人がきていた。私の口をついて、

「二人の者おともを申せ」と出た。(その人は今長崎の香焼にいる。) その人は自分も一緒にお参りしたいと申し出たが、その時わたしが弘法さんになって、口をついて言葉がでた。「そなたの義理ある母が申すには自分の腹をいためた子供なら死んでもかまわん、義理ある子供なら死なせん。そなたは20歳のときに石ぶたをかぶらねばならない身であったが、…」 「申し訳ありません。25年間わすれたおわびに毎年まいります」それから毎年参ったが、70歳を超えたのでいまはいっていない。弘法大師との因縁は岐宿町、白石に弘法大師が中国にいった時に水を採った時の船をつないだ大石があるという。

1) (靈感) 夢-靈感には哲学の勉強が必要だ。夢を見たとき、ただの夢と思って捨てると必ず戒めを受ける。20日間も血を吐いて寝込んだことがある。しかし、素晴らしいおかげを受けることもある。お手伝いに行って「この雑巾をあらっていらっしやい」と言われて、水の無いところでどうしようかなと悩んでいた。夢の中で天を向いて仰ぐと目の前にひしゃくとおけが現れた。病人をみて、八分通りあの世にいつている人はだめ、二分現世に残っているそれをなんとか生かす努力をする。40数才でガンにかかっている人が30年も生きたことがある。めくらでもあきます。いざりでもたちます。若松町神仏(こうぶつ)の中島吉次郎というひとはいざりであったが、立つようになった。御礼に松葉杖30cmぐらいのを納めた。

その銘 若松町神仏(こうぶつ) 昭和37年10月吉日 中島吉次郎 45歳としるしたものが見地にある。

2) (靈感) すがた一祭壇に向かって、拝むと因縁がその姿になってあらわれてくる。動物の因縁があるとその形相になったり、お金の因縁があると手を握ってはなれなくなる。因縁を祈祷によってはらう。因縁はたたみにしみついたインクのように落ちにくい。

玉之浦は昔は裕福なところで八十八ヶ所をつくった。佐野おふという人が発起人であるが、その人は雨ごいのお陰をいただいたという。その人が山にいつて行方不明になった。私もそのころ四人の子供を生んで貧乏だったが、その人のことが気がかりで、歩いて行った。夢でお座敷からスーツと毘沙聞さまがあがった。きょうはおばちゃん帰ってくるよといったら、本当に帰ってきた。玉之浦で病人を拝む時は毘沙聞天が「必ずIはいかんなんらんといい」Sさ

ん(未亡人でI氏の一番弟子か?)が毘沙聞天にいったときも、朝具合がわるかったが、(胃が冷たかったが)先生のお供していくじゃけに何もなかと思ったら、良くなった。

3) カゼを落とす。カゼには生霊、死霊、生死霊の三つがあり、生霊とは他人の恨み、生死霊とは恨みをのんだまま、死んだ霊のことでありこれが一番落ちにくいという。

大宝院(西の高野) 旧8月の17日、18日 現在は10月 大宝院の祭りには佐賀にいる友人の僧侶、真言宗の先輩や後輩がお手伝いにくる。御縁日には七福神のお姿を安置した。I氏の教会の縁日は毎月20日である。(主人が20日に亡くなったので)二十日祭をする。行事はお接待である。お昼にお茶、ちり紙などを配る。御祈祷は二十日祭ではない。弘法太子に止められている。全体の御祈祷をして個人の御祈祷はしない。

<修行> 四国八十八ヶ所にお参りにいった。昭和47年、昭和56年、昭和62年いずれも6月にいった。毎年、参詣に行くところは五島のなかでは玉之浦の七岳神社で旧正月の28日毘沙聞天の祭りがある。そこにも八十八ヶ所がある。長崎市穴弘法へいく。日にちはきめてはいない。

4.

事例4 Y・H 奈良尾町中山(昭和6年生) 59歳(1990年調査時)

中山不動、中山身語正宗

はじめはJ・H(祖母)が習った。(明治10年11月-昭和28年10月 数えの77歳でなくなる。)母のM・Hが跡を継いだ数えの40歳でなくなった。中山不動は今は赤い不動なのであるが、それ以前は黒い不動が祀ってあった。現在のものは宗祖寛恵上人が昭和8年に中山に来たといううわさがある。その時に持ってきたものと思う。

<ライフヒストリー>

この近くの福見高井旅の村は隠れキリシタンの村で自分の家は「チンカン、チンカンとお経を上げる」と言われて、からかわれた。家でこういうことをしているのが子供心にいやでたまらなかつた。16歳の時、脳膜炎になって高い熱がでた。祖母は子供を3人なくしているの孫は2人育てたが、もう駄目だと思っていたという。苦しいことばかりの人生だと祖母は思ったそうである。有川の方に医者がいたので、来てもらうように頼むと晩の9時から10時頃になってやっと着いたそうである。「命はもう3

日と持たない。死亡届を有川まで書いて届けるのは面倒だ」とその場で書いて行ったそうである。祖母は母に先立たれ、孫まで先立たれるのはかなわんと一生懸命おすがりをして行をした。3日後に助けてもらった。私が目覚めると頭の上の毛がそってあった。そして、おばあちゃんの額が青かった。「どうしたの」と聞くと私が暴れておばあちゃんを放り投げたそうです。頭と足の裏を一生懸命冷やしたそうです。お不動さんが私を助けた。他人のために人を助ける人になれと得度させられたのが17歳の時です。縁あって養子に来てくれる人と結婚した。大変思いやりのある人だった。おばあちゃんが亡くなったのは、私が数えて23歳の時であった。おばあちゃんは自分がなくなるということがわかっていた。年の晩(大晦日の晩)だった。私に言った。「机の上で習うことはいつでもいいが、仏さまに習うことはいまのうちに習っておけ」と言ってなくなった。古い信者さんたちが残っていた。そんな人たちからはっぱをかけられて、私はわからないまま、泣きながらお参りをした。好きではなかったが、宿命であったからやった。母は一度大分に行っただけでも、結局跡を継ぐようになって戻ってきた。出来ないで泣いていると、丸川大吉丸のおじいさんにあたる人にひどく叱られた。「大和尚も小僧から始まるぞ」と。今から思えば叱られてかえってよかったと思う。長男は進んでやった。私は反対であったけれども。高野山に行くと言って自分から行った。中山身語正宗になる人は女性が多い。五島に7カ所、奈良尾に3カ所ある。母がなくなった時はこころ残り、母は自分がいただいたお慈悲をおばあちゃんにおいていった。母がなくなるときも母は自分はあと3日の命だと知っていた。来年この教会の50年祭をする。

[宗教活動]

旧暦の17日に開眼法要をする。この辺は月夜間(つきよま)と言って17日が漁の休みである。この日に大漁祈願をする。

オンピー月に一回、以前は28日であったが去年より18日に変わった。奈良尾岩瀬浦、福江の方から何人かくる。漁のお願い、海上安全、大漁祈願、家内安全、入試合格祈願など。最近二つの会社が倒産し景気は良くない。覚永上人は5日、大師は21日にお祭りをする。

家はらい、地鎮祭を奈良尾方面でする。

御参拝は2月21日で祖廟参拝をする。長男は今月に2回参拝している。

少し離れた場所にお堂と御滝場をそなえた道場を持っている。

このほか奈良尾には口で息を吹きかけて病気をなおすというK・T(89歳-1990年2月24日当時)がいる。自宅を訪ねたが、不動明王の掛け軸のほか数珠、錫杖などの法具があった。20代の頃足が悪く、それを直すために続けて三回、四国八十八カ所を回った。大音寺(五十番)から打ち始め、一日に二里も歩いた。最初に回った時に別府の行者、佐藤豊弘師に会い指導を受けた。山で御利益を受けた。自分で自然に力となって出てきた。若いお嫁さんの二十歳くらいの人を直した。この人は足も肩も体も痛く、お医者さんでは原因がわからなかった。そういう人を直す。まず、数珠ではらい、お経を唱え、口で吹く、主に奈良尾の人がやってくる。2ヵ月くらい通ってくれば直る。免許状が飾ってあった。免許書、K・T右不動明王崇敬人 修行ノ徳ニ依リ加持免許ヲ証ス 昭和35年2月吉日臨濟宗大本山大徳寺派(中略)佐藤豊弘

考察

さて、以上ライフヒストリーだけを述べるだけではこうしたシャーマンの職能者の全貌を説明できないので、宗教活動や祀っている本尊なども合わせ記述してきた。

最後にこうしたライフヒストリー研究のはらむ問題について若干の考察を述べておきたい。紙数の都合で多くを述べることができないので、一点だけ論じて本稿を終わることにする。それはライフヒストリー調査の相互依存性ということである。最初に述べた通り、佐々木と私は同じ対象を相手に聞き書きをした。文中の事例3、I・Sと略された人物である。佐々木の記述をそのままここに引用することにする。

「I・Sは富江町に生まれ育った。福江に移り住んだのは昭和36年である。彼女の旧姓は尾崎であり、尾崎家の先祖は四代前に山口県からやってきて富江の藩主に仕え、藩主から屋敷を賜るほど働いた。廃藩となつてからの尾崎家は仏師を職とし、五島各地の仏像を彫ったり修理したりした。I・Sの祖父は仏師の仕事は自分に向いていないからと弟に後を継がせ、自らは篤い信仰家として生涯を過ごしたという。彼女は六人兄弟中唯一の女子であったが、十二歳の時母が亡くなったので、家事を手伝い、寺へ行ってお経を読むのが好きであった。二十歳のとき、洋服店を営んでいたI家に婚入したが、結婚生

活十ヵ月にして主人が病に倒れた。病院の世話になっても経過が良好ではなかった。夫の病気を治すには信仰が必要だと考えた彼女は、夫に五島の札所巡りを強く勧め、もし信仰に入らなければ離別するまで言い切った。翌日夫は信仰に入ると言ったので八十八ヵ所を巡って“お大師さん”を信仰した。何度巡ったかは憶えていないが、夫は一進一退を繰り返しながら十年生きた。彼女は二十一歳のときに、四国の仏具店から大師像を迎え、仏壇にお祀りした。彼女が三十歳のとき夫は死去し、彼女と子供三人が残された。夫の死後、彼女はますます信仰に励むようになった。」⁵

以上が佐々木による聞き書きである。筆者は当時この論文を読んだことがあり、五島にハウニンという民間宗教者が存在するのを知っていた。しかし、I・Sと知りつつ、意図して調査をしたのではなく、たまたま五島を訪ねたおりにこのI・Sにたどり着いたのである。イニシャルだけでは探しようがなかった。しかし、彼女はハウニンとして有名であり、当時福江の町でよく知られた存在であった。以上読んでみると佐々木の聞き書きの精緻なことがわかる。

次に入巫期のことについての記述を引用する。

「I・Sは夫の死後、お大師さまが唯一の頼りになり、常に尊像を礼拝し、札所巡りを続行した。ある日、尊像に経文を唱えていると、経机の下で声がし、「すがってくる人は助けてあげよ。」「助けてやれば包みを出さず」と言っているのが聞こえた。また、夢枕にお大師が立ち、「お前は経文をあげる以外に生きる方法がない。」と告げた。彼女は人助けこそ自分の使命であると自覚するようになり、修行に精を出した。そのうち何処からともなく人がきて「あなたは信仰の人であるから、あなたのお大師さまは有難い。お参りさせてください」と重箱に入れた米を供えてくれるようになった。子供が病気になっても病院に行く金がなくこまったときには、尊像に「お金がありません。なんとかして下さい」と祈願した。すると夢の中で大師は「かくかくの経文をあげると悪霊は退散する」と教えてくれた。子供の水落ちに腫物ができ、リンパ腺が腫れたとき、大師の指示によって一週間水垢離をとり、搦んでやると、水落ちの腫物から膿がでて治った。ますます信仰に自信を深めた彼女は、白装束の姿で只狩山の御堂で七日七晩の間籠り断食修行を繰り返した。修行を重ねる毎に靈感は高まり、問題があると、その解決法が目映り、耳に聞こえ、夢に出るようになったと

いう。それはすべてお大師さまが知らせ教えてくれるのだと彼女は納得している。依頼者が多く集まるようになり、生活が楽になった頃、夢の中で声がして、「いただいた布施の三分の一は高野山に、三分の一は伊勢神宮に供え、残りはお前のものにせよ」と命じられ、彼女は現在もこの指示に従っているという。」⁶

二種のライフヒストリーを比べて大きな矛盾はない。先祖は仏師であること、主人を10年間看取って亡くしたこと、弘法大師を信仰していることなど、いただいた布施の三分の一は高野山に、三分の一は伊勢神宮に供え、残りはお前のものにせよ」と命じられ、彼女は現在もこの指示に従っているという点などである。これらは彼女のストーリーの一貫性を物語るものである。しかし、先にのべたように二種のライフヒストリーは話者と聞き手の相互作用の上に成り立っているものであるから、そこには若干のずれがある。長崎市にある穴弘法の信仰が私の聞き書きでは大きな人生の転機（エピファニー）⁷になっているのに比べ、佐々木の場合はそれに触れていない。むしろ、熱心な弘法大師信仰が語られている。佐々木の場合、只狩山の御堂での修行が述べられているが、私の調査ではそれが欠落している。それは、聞き手の属性、佐々木は仏教系の大学の教員であり、私は地元長崎の大学の教員であるという点を彼女は考慮し、説得力を強めるためにあるいは、彼女がとっさに脚色したものかも知れない。しかし、ふつうの会話で我々自身も同様なことは行っている。その点だけをもって全て虚構であり、何の根拠も持たないものとしたら、彼女を当時訪ねていた毎日20名を越す信者の存在はどう説明できるであろうか。筆者には民俗宗教の調査者として、それらを全く捨て去ってしまうことはできない。ライフヒストリーの聞き書きは一つのリアリティーに収斂できるものではなく、私がまた別の時に訪ねた時にはまた、さらに別のストーリーが語られるかもしれない。聞き書きについては多くの問題がすでに論じられている。⁸この小論では一つの問題点のありかを示すだけにとどめて、将来の考察にそなえたい。⁹

脚注、参考文献

-
- ¹ 佐々木宏幹 「長崎県五島の女性祈祷師」『シャーマニズムの人類学』所収1984年、弘文堂
- ² 北部九州におけるシャーマンの職能者について一特にその成巫過程をめぐって『民俗宗教第5集シャーマニズムの世界』所収、1995年、東京堂出版
- ³ 大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』1998年、弘文堂参照
- ⁴ 中野卓『口述の生活史』1977年、お茶の水書房刊
- ⁵ 佐々木、前掲書、p.160
- ⁶ 佐々木、前掲書、p.163-164
- ⁷ 桜井厚『インタビューの社会学』、せりか書房、2005年
- ⁸ 桜井、前掲書
- ⁹ 中野卓・桜井厚編『ライフヒストリーの社会学』弘文堂、1995年、L.Lラングネス、G.フランク著、米山俊直他訳『ライフヒストリー研究入門-伝記への人類学的アプローチ』、ミネルバ書房、1993年、ケン・プラマー著、原田勝弘他監訳『生活記録の社会学』、光生館、1991年他を参照されたい。

なお本稿は平成元年度科学研究費補助金（C）「北部九州およびその離島におけるシャーマンの職能者の研究」（課題番号01510185）による研究の内容の一部である。